

岡本かの子「生々流転」論——「水の性」の在処——

外 村 彰

一 はじめに

岡本かの子の長編「生々流転」は、作者の歿後『文学界』昭和一四年四—一二月号に連載の上、改造社から刊行（昭一五・二）された。「乞食の血筋出の大学教授の妻の子」として育つた蝶子が、許婚候補の「伶俐で人の良い青年」池上清太郎、そして彼女が通学していた都内の「F——学園」に勤める「園芸手」で「何の癖もない大柄の青年」葛岡、「体操の女教員」の「中性的の老嬢美人」安宅先生との交渉を経て、母の死を契機に「乞食」となって生活し、最後に「女船乗り」となるまでを物語るといふ内容である。

同作はかの子文学の総決算的な代表作とされる。連載時に「神経の逞しさ」⁽²⁾、「脈々たる生命感」への言及があり、完結後

の書評でも「生命の可能性の豊富さ、奇怪さ」があるとの指摘がなされていた。おおむね印象批評ながら、これらは作品に横溢する生命感の受容を伝えている。以後「生々流転」の論評は、かの子の小説で頻用される「生命」や、作者が仏教研究者でもあつた事実から照射されるかたちで、仏教的な観点からの解釈を主流としてゆく。

たとえば亀井勝一郎⁽³⁾は、かの子の仏教観に触れながら「『いのちのため』といふ苛烈な祈り」を根底に持つ「異形の精神」なり「宿命」の自伝的告白をこの小説から読みとつた。また仏教の観念性を近代小説の形式に「偏倚」させ芸術化した「智慧」をかの子の文学の特質とする石川淳⁽⁴⁾は、「娘の縁起輪廻の歴史」をして「龍樹的空観の具象化」とみなしていた。

「生々流転」には、たしかに仏教的なイメージが多く織り込

まれている。「日本の生んだ最初の形而上的な、肉体とまでなつた宗教的な文学」と宮本壽(7)が称揚したように、生命の「流転」の象徴である川ないし水が蝶子の経歴に沿うように描かれている点や、「無」「諸行無常」といった言葉が使用されている点をもって、仏教性内在の証とすることも可能であろう。「東洋の文人のあいだに伝統的に理想とされた生き方」を「自在に造型した」ところを「非凡」とする杉森久英(8)も、その根底に流れる仏教性を強調していた。小田良弼(9)もまた川辺での「乞食」体験を経た蝶子の「女船乗り」への転身を、理想的な仏教的境界に達するまでの階梯であつたとする。

いっぽうで瀬戸内晴美(10)による、団円近くの市塵庵春雄の恋文には「明らかに作者かの子の死後の出来事が織りこまれている」との解説とかの子の夫・一平の加筆への論評は、作者という概念の自律性を揺るがす一事件ともなつた。瀬戸内の提起した合作説はすでに定見化し、「生々流転」を読む際には逸することのできない問題点となつている。

近年までの「生々流転」論には、それまでの仏教的解釈に拘泥しない、多角的な読みが見受けられる。それらの見解は次節から援用してゆくこととするが、拙稿の立場は、仏教的な読解への還元にはこだわらず、蝶子の人間像について本文の表現から考察することを主とするものである。とりわけ蝶子の本質と

みなされる「無性格」「水の性」、また鍵語と考えられる「擬装」「偽装」を通して、この小説の評価を総体的にとらえ直すことを目的に据えようと思う。また周囲の登場人物との関係によつて変容する主人公の心情分析から各々の人物形象と文芸的構造を明らかにし、あわせて関連作品など同作の成立事情についても触れておくこととする。

二 蝶子の人物像をめぐつて

小説の語りは学園在学中の一六歳から鷺市の「倶楽部式会館」の「女経営者」マネージャーとなつた二三歳頃までの期間（幼時の回想をふくむ）にわたる。蝶子は、学園卒業前の一七歳の時、池上家の「浜町の寮」に春まで住し、赤城山での安宅先生との会見を経て、半月の間北関東を葛岡と旅する。休校していた学園を「任意退学」した彼女は、東京に戻つて半年間「製菓会社の包装」の仕事に就くが、「三月越し」看病をした母の死後、すべの係累を脱して「乞食」となる。その「四年」後に、市設の会館の経営者となり、最後に船員となるのである。

この小説を推進させる蝶子の語りには特異なところが多い。冒頭の文章が後半約三分の一の箇所まで再び記され、他のかの子作品と同様ながら、章立てもない。船員になつた時期が何時な

のが判然とせず、語りの現在も曖昧である。宮内淳子も「どのように語るか、また誰に語るかという制約から自由」な「滔々と流れ」る女性一人称の語り手をして「おそらく近代小説の常識から逸脱した存在」とみている。こうした蝶子の自的な語りは、そのまま彼女の人物性にも通じているようである。

では蝶子の人物形象とその本質とはどのようなものであろうか。すでに学園の生徒時代の彼女は、「一通り女としての触角は備」えており、外見面でも「人の目にはとかく派手で、心に止まる娘」に成長していた。「勝気」だが「媚態」も覚え、華やぎのある蝶子には、年齢相応に恋や愛が「胸の痛むほど欲しくなるとき」もあつた。だが、そうした心情を自分の中では「中味の違つたものが擬装してゐる形」とみなしていたのである。彼女のいう「中味の違つたもの」とは、思春期の異性への欲求の湧出と思われるが、恋愛をめぐる感情が、蝶子には「擬装」の形としか自覚されなかつたということは、彼女本然の欲求が異性を対象とする愛といえるものとは異なる心情であつたことを示している。

それでは、恋や愛といった「擬装」の奥にある「中味」の在処はどこにあるのか。蝶子はおかねて周囲の「男性」に対し特別な意識を持つことがなく、学園でも「安宅先生に所属のグループ」に属する友人達（吉良・義光ちゃん・八重子）と、いつも

「性」や「個性」を「超越して同心同体」になつた心持ちで日々を過ごしていた。身近な友人にとつて蝶子は、「同心同体の睦び」の一分子で、それ以上の存在ではなかつたようだ。じつさい、「無邪気」に遊ぶ学園の三人の男女には、その年齢に相応した恋愛模様が描かれない。おそらく、そこには「ピュールリタニズムの男女交際を主張」し、「心友としての男女の友誼の存在を信じて」いた安宅先生の影響もあつたと思われる。その点、蝶子には安宅先生からの感化があつたと考えられる。

蝶子は、そのような交際の延長線上に池上や葛岡をも置こうとした。彼らに対しても「恋とか愛」をやはり超越した「ただ頼母しい男性の友だち」でいることを望んだ。その理由としては、父の母への愛執ぶりをみながら育つたことへの反発もあるだろうが、そもそも蝶子からは、他者への依存心めく恋愛感情の発現は見出せないようである。

やがて学園内には葛岡が蝶子に懸想し、彼と親しい間柄の安宅先生が嫉視しているとの風評が立つ。その証拠のように葛岡は蝶子を避け、安宅先生も蝶子の前では「女らしい所作」を露骨にみせるようになる。そうして蝶子は学園で「誘惑の蜜を匂」わせる者のように噂されていたのだが、自身の人を恋しがる心情は「単純」なものでないとし、次のような心境を述べる。わたくしが人恋ふる気持の中には、嘗て父として不如意

であつたその父、母として現在不如意であるその母、その中に向つてどうしても恋はずにはゐられぬ根元の父母のやうなものがある気がしまして、その求めごろの切なく募るときには、ただ痛痒い人恋しいぐらゐの沙汰ではなく、息も詰まるほど寒いものに締め絞られるのでした。

蝶子はこのような思ひを「みなし児の感じがしてなりません」と換言しており、あわせて周囲の「無邪氣」な人々に対し、妬ましさや憤りすら抱くとしていた。そこから察するに、蝶子の本当の「求めごろ」は、「根元の父母のやうなもの」への希求であり、「永遠の父、永遠の母」的なものへの郷愁であつたようである。かような欲求を得られぬ空虚な孤独感が「みなし児」の感覚となつて蝶子の「寂しい性根」にかねて巢食つていたのである。

ただし、この「根元の父母」への恋しさは、他者を他者として認め恋の対象とするといった情緒ではなく、むしろ自己の内奥を凝視し、その果てにある父母的幻像を探ろうとする観念的な欲望であつた。それは裏返せば、現実の他者関係に対する閉鎖性にも通ずるものであろう。

蝶子はかねて「無邪氣」な学園仲間と過ごせた日々を「有難く忝けなく」思い、恋愛を超越した男女の友を得られたなら「どんなに嬉しいでせう」と考えていた。その理由を蝶子は

「お互ひに抵触」しない関係が保てるからだとした。このように彼女は内向的なまでに「根元の父母」を求めあまり、他者に向けられるはずの「人恋ふる気持」を捨象していたといえる。つまり、彼女が求めたものとは具体的な他者に存していなかつたのである。他者に「愛憫の情」を抱きはしても、対外的な恋愛感情は蝶子にとっては「擬装」であり、その「中味」には「根元」を希求する、内向する「求めごろ」が存していたのである。それほどに「根元の父母」への「求めごろ」は、蝶子にとって「恋」をも超越する切実なものであつた。

ちなみに、蝶子は「根元の父母」への恋しさが募り、「みなし児」の思ひにさいなまれた時には、無邪氣な人々を「避け」て、「花畑へ、果樹園へ」と「自分と同じ気持らしい草木をなつかしみに」行つていた。蝶子は直観的に、植物が「根元の父母」たる土に向かつて根を伸ばそうとする様態に共感し、自己の真なる「恋」情を投影しようとしていたと考えられる。

さてここから連想されるのは、かの子の歌集『浴身』(越山堂、大―四・五)の、

おのづから咲ける花かもおのづから人の生くるはかたかるものぞ

花のごとく土にし停^たたばわがいのちおのづからなる色にし

咲かむか

といった歌々である。⁽¹²⁾土に根をはって「おのづから」の生命のままに咲く花の色、それに比して自我に執着し、自然な「いのち」の伸張を果たせない人間。「わがいのち」からの「おのづからなる色」を見出せないのは、人間として生きてゆく以上逃れられない自己欺瞞ゆえである。それでも純一な「わがいのち」のありようを凝視し、「土」に「停」つことで「おのづから」たらんとする詠み手の心象が観取される。大矢武師はこれらの歌を宗教的に解釈し「『花のごと』おのづから生きることが晩年にかの子の求めた理想的心境であつた」とした。

右記したようなことどもを補助線とすると、蝶子はこの世に生きる以上必要とされるはずの「擬装」を解いて、自己の生命の本質、自己の本性の「色」を教えてくれる「根元の父母」を求め探ろうとしていたと考えられてくる。彼女の内なる「求めごろ」は、その機縁を得るべく、共感する草木の「停」つ「土」の世界に親しもうとしていたのであろう。

すでに蝶子は七歳のとき、病気で衰弱していた父の豊島蝶造から「人間はなあ、四十を過ぎたらまた元の根に帰るものだ。二度と生涯を出直すにしても、一人は根に帰るものだ。さうしなければとても心が寂しくてやり切れない」との「本能のままなる声」を聞かされていた。蝶子が十三歳の年に彼は肺病で死ぬが、「わたくしの生命に取絶るやうな妙な言葉」を残した

と感じた父を「憐れ」ともみなして「負担を背負つて行く気持」を抱くようになる。

「中年過ぎ」から「孤や土の親しみ」への強い「憧憬」を抱いていた父の真意は、衰弱して「不如意」のまま実現できずに終わる自分の希望を、蝶子という次代の生命に託すことになつたといえよう。蝶子は蝶造の言葉を「女中」の鳥（しま）から聞かされて成長し、彼の心残りを、すでに自らの「負担」として意識するようになっていた。そうして彼女の「生命」は、父の遺志「一人は根に帰る」に感応し、それを数年後の「乞食」行によつて実現させてゆくのである。

溝田玲子⁽¹⁴⁾は、「父の『望み』を『受け継いで叶えて』いこうと考えている蝶子を、〈男性性〉や〈女性性〉といったものを超越していく可能性を持つ存在」として「捉えることが可能」とした。たしかに蝶子の「恋」を超越した欲求は、性の差異を超える「根元の父母」への探求心であつて、彼女の「いのち」の器は、性差に拘泥するような境涯を超越している。

このように、父の希望を自然と受け継ぐ気持ちになり、以後も他者から「不如意」を託され受け容れてゆく蝶子の感受性は、言葉のかたちで発せられた意志をわが身に受容する能力に長じていたと考えられる。蝶子は、現世では果たせないうた他者の希望を受けとめ、継承してゆけるほどの器量を備えた人物と

しても形象されていたとみなし得る。

池上、葛岡、そして安宅先生は、そのような蝶子に惹かれ、関わってゆく人々である。彼らは、生来の性質を家庭環境など自他の要因によって矯められており、各々の生を「おのづから」のままに伸張させて来なかつた点で共通している。それだけの人間性は異なるにせよ、自己の「生命」をありのままに開花させられなかつた「歪んだ運命」を歩んだ「不如意」を抱くところは同じである。石川淳が彼らを「作者が娘の旋回運動を特定の方向に誘導するために、要所要所に配置した刺戟性の仕掛のやう」な存在だとみたように、三者は蝶子の人物像を語り、己の「不如意」を彼女に託す役割をもつて形象化された人々であつたといえよう。

ちなみに小田良弼は、「われわれが知性的社会的人間として生き行くかぎり」、「反自然的」な「類型的固定的枠」にとらわれるとし、かような「非個性的生」では「自己に固有の世界は無意識下に押しや」られてしまうという。池上、葛岡、安宅先生は、各々の内包する「固有の世界」を、そうした「枠」によつて「不如意」のまま発現させ得ぬままに生きてきたと考えられる。

以前蝶造が「海外貿易の商法の顧問」をしていた商事会社を経営する資産家の息子・池上清太郎は、卒業を前にした蝶子を

自分の寮に住まわせていた。その頃彼は、「自分には未だ真のいのちの緒口が見付からない」のだが、それを持つ蝶子により「その蓮の糸を抜き出」され、「しつかりと結びつけて永遠に生かして貰ひ度い」と訴え、のちのちまでその執念を抱き続ける。池上は後見の「俗物」たちに自分の求める「純真」さを「蹴散らかされ」たため、その生に強い「不如意」を抱いてきた。さらに「池上家の人間の現実遊離の浮游性」を語り、自分を滅びに向かう「慾天」に譬えた彼は、蝶子の「いのち」に己が「荷を分けて担」つてもらおうとする。

自らを「瀕死人」に擬し、蝶子の「いのち」を「酸素吸入」とするといふ「共住みの作業」を求めた池上は、彼女の「現代娘」ぶりを「仮面」に過ぎないとして、次のように評していた。

蝶ちゃんは（中略）土の上にちかちか起き臥して逞ましい土の精気を一ぱいいのちに吸ひ込ましてゐる原始人のやうな逞ましい女なのだ。

この言葉によつて蝶子は、「一向有難くもない乞食の子の血統」に思い至るのだが、のち彼女が「乞食」となる伏線にあたる発言ともいえる池上の蝶子評は、「根元の父母のやうなもの」を恋う蝶子自身の「土」を求める心の在処に通じてもいよう。この後、蝶子には「何分間か十何分間か」の「無念無想の時間」が経つことになる。その折の心境を以下に引いておこう。

全く崩折れてしまつたあとの何にもない自分の内部をひよ
いと覗きますと、夕立のあと、蟻塚を蟻の子が粒々積み上
げて直すやうに、「無」が「無」に向つて頻りに粒々を積
み上げてゐます。

何の光りも無い暗闇の空洞の中で、「無」が「無」に向
つて――

右の「粒々」を「積み上げやうとする力」によつて、蝶子は
自らの屈託を立ち直らせるが、そこから、かつて病臥した時の
無意識状態のうちに「われながら意趣が知れない」ながら、
「ひと匙、食べては ちちのため」「ふた匙、食べては はは
のため」と歌い粥を食べた場面が想起されている。池上は彼女
がその「逞ましい」力を普段「勝氣」「利発」の性格を示す時
には隠しているが、それと「気付かずして」洩らす言葉にこそ
「本然の声」が発せられるのだという。おそらく「ひと匙、食
べては」の唄は、この「粒々積み上げ」られる「無」の心境の
発露なのであろう。

その声に池上は「敬虔さでひれ伏」すほどの気持ちを抱くの
だが、こうした反応の理由を、小田良弼は「はからずも蝶子に
よつて露呈された根源的命」が、「知性的相対的人間」池上の
「根源的命をゆり動かした」からだという。つまり自意識過剰
ゆえ「おのづから」から遠く在る池上にすれば、蝶子の内部の

逞しい「原始的」「いのち」の「純なる姿にふれて、おのが根
源の命を触発せられ」る経験は、自分の本然の魂の在処を直観
させる根源的な感動のそれだったわけである。

これに対し、普段から土と親しみ「花作りを職業とする」葛
岡は、池上とは異なる蝶子観を持っていた。池上ほどの「神秘
憧憬病患者」性は見受けられないものの、蝶子への愛情を意識
的な無関心のうちに「擬装」していた葛岡は、彼女を「派手で
勝気で、爛漫と咲き乱れる筈の花の蒼が、とかく水揚げ
兼ねてゐる」風情の女とみなし、「蝕まれた蒼の女」「わくら葉
の新緑のやうな娘」とも換言した。葛岡は少年時から「暮しの
苦勞」により「何か水を揚げ兼ねてゐるものを身の内に感」じ
てきたため、蝶子にも同じ傾向があるのを見抜けたのだという。
草木の「停」つ「土」に親しもうとする蝶子が「水揚げ兼
ね」るのは「根元の父母」的なもので、新鮮なはずの「蒼」
「新緑」を蝕み枯らせるものとは、「おのづから」たり得ない
現状の生活を指すのであろう。そうして、蝶子の「みなし児の
感じ」を彼なりに評した葛岡自身も、自身の「不如意」を抱え
ていた。早く父を亡くし、母と祖母の生活のため働いてきたが、
学園を退職させられ（のち池上家に雇われる）、今や「心友」
であった安宅先生への「恩愛」、蝶子への「恋」、「老女二人の
生活」という「三面の鏡」に囲まれて抜け出せない「墓」のよ

うになった「自意識」に悩んでいた。蝶子はそう告白した彼の「不如意」も担うことになるのである。

蝶子と葛岡は、年末から郷里の群馬県に戻ったまま帰らないでいた「三十五六の独身嬢」安宅先生の許を訪れる。葛岡への共感からそれまでの親愛感とは逆の反発心を秘めるようになっていた蝶子だが、先生の滞在する赤城山において、その真情を直接聞かされることになる。

蝶子と自分は「根が同型な女」だとする安宅先生は、「少女時代の自分もし事に妨げられず、素直に育ち進んだら」自分も蝶子のようになっていたらう、との「未練や口惜しさ」を語る。さらには「流れに任せ」て「どの岸にでも漂い咲く「萍」のような「自然の美しさ」、「女の本能の美しさ」が蝶子にはあり、それを「うらやましく」思っていたと彼女は話すのであった。

もとは「気の弱い神経質の少女」であった安宅先生は、「地方の因習や伝説の生活」を脱すべく「性格も肉体も全然反対の方に造り直し」、「世にも不自然な健康者」となって生きてきた。先生は「死んだ氣に」なって「理知の短剣」「自我の鎗矢」を身につけ、「感受性もろとも」にその性格を「切り捨て」てしまったのだという。しかし蝶子の影響から、孤高の意識のうち「克己」の生き方を選んできた自己の、内なる「骨身の女が

疼き出し」てきたため、そこから「逃れ」得ぬまま、「本能の執着」を強く感ずるようになったのであった。

このような先生の「芝居氣」を介して語られた「女の正音」に蝶子は「心のよすが」を覚える。安宅先生は、自らの「擬装」をはつきり自覚した証に、「元来、山の性」であった自らを、その「根」に還らせる決意をもって、割れ出した湖の水に乗り「岳山重畳の果」へと姿を隠す。

安宅先生はついに自らの「根」に還るといふ新生の道を選んだわけだが、すでに蝶子の行末を見透していたかのように、赤城山上でこのように語っている。

あなたは水の性、(中略)人々の見果てぬ夢をも流し入れて、だんだん太りまさりながら、流れそれ自体のあなたは、うつつともなく、やがて無窮の海にはいるでせう。(中略)水の性のものはそれ自体、無性格です。性格は土によって規定されるのです。(中略)性格を規定されて来ねばなりません。あなたが乞食の素性であり、一度はその経験に戻る運命に在ることを(中略)感じております。結構です。一度は土に流れてごらん下さい。きつと新鮮なものがあなたに見出されて来ますから。

蝶子の「乞食」行を経た「女船乗り」への遍歴は、すでにこの予言により「規定」されていたようである。なお峰島旭雄は

「土の性」安宅先生は「蝶子のアンティテーゼ」であり、彼女を「原点にもどらせるアウフヘーベン（止揚）の原動力」たる存在だと評した。関礼子も、先生を「巫女的な導き手」とし、続く後半部は蝶子の「自己の存在の根ががしの物語」となっていると指摘していた。このように、右の伏線めく予言は、蝶子を本然の「生命」探しのための「乞食」行へといざなうてゆく。じつさい蝶子は、のち葛岡と過ごした北関東の小川と平野から、「このまま落魄れて、川のはとりに乞食女となつてしまはうかしらん」と思うに至っていた。かくして蝶子は、三人の「奇矯ないのち」に取り捲かれて過ぎした疲労から、「土の上の孤に臥して大地の慈しみに掻き抱かれ」といと願うようにもなつてゆくのである。

その願いを決定的にしたのが、母の死であった。蝶子はそれまで「老獪に籠つてゐる執拗さ」や「浅墓な技巧」を示す母を「剥いでも剥いでも本心の判らない」人と感じており、「諂曲の性質が嫌ひ」であった。池上和娘を結婚させようと策謀する彼女の狡さに「秘密の城に孤独で立籠る」という「カモフラージュ」で心理的に対抗もしていた。もともと「心の通じない運命の母親」とまで感じていた蝶子には、母への愛着心が稀薄である。母への違和感から、「二重になつた自分」という「偽装」を示しすらしていた。しかし、「尿毒症」の悪化で死期を知つ

た母は、「自分のいのちを子に持ち伝えさせやう」とする「本能」から、それまでの「殻の性格」を脱し、「最後に自分の気持」を「浸み込ませ、通し貫いて」、蝶子の「中に生きて行かうとする」。蝶子の父と同様「臍の緒」を託した母の真意を知つた蝶子は、以下のような心情を述べる。

また、わたくしは、どさりとまた一つ自分の心に重荷を被けられる気がしました。あ、あ、わたくしは一体いくつの人の中のいのちの重荷を背負へば窮屈から許されるのでせうか。それまで蝶子は、母を自分とは「別仕立の人間」とみなしていた。だが思いがけず亡母からその「本性」を被けられ、それまでの「心構へ」が崩れてしまったのであった。こうして池上、葛岡、安宅先生と父母から「重荷」を被けられて「精も根も尽き果て」てしまった蝶子は、亡父の「数奇な望み」を「受け継いで叶へ」るため、いよいよ「乞食」にならうと決するのである。ただしそれは「上品なれつきとした奥様になりたかつた」母の願ひとは逆行する行為ではあった。とはいえ、蝶子は「殻の性格」を脱いだ母の死により、自らの「殻」すなわち「偽装」を解き、「三界無住」の思いをもつて「土」と暮らす「乞食」に転身する縁を得たのである。それを「人生の休息の幕」だと蝶子は言うが、この予定調和的転回は、彼女があらたな生命認識を得るための「根元の父母」探求、あるいは「素性」回

帰として意義付けられるのである。

三 「乞食」行からの帰還

「生々流転」には冒頭の「遁れて都を出ました。」以下の文章が、後半三分の一ほどの箇所再度用いられる。このフラッシュバックのリフレインの後に「遊郭のある川上の丁——町附近から、川下」の「鷺町（市）」への「乞食」行が始まるのだが、それ以前の叙述は同作の要所たる「女乞食」の描出に至るまでの長い助走期間であったとも思われる。

「あなたは無性格な水の性、土によつてのみ性格を規定されます」「一度は土に流れて」みれば、「新鮮な魂が見出されて来」るとの安宅先生の言葉は、蝶子の本質を「規定」し、その後の行動を予言した。池上、葛岡の蝶子評、そして父の言葉も、同様に彼女の未来を「規定」しようとするものであった。そしていよいよ蝶子は本格的な「根探し」の段階に入るのである。

もともと蝶子は自分を「都会の子」であると同時に「官能の子」だとみていた。「官能によつて受容られる四圍からの感覚によつて、自分で人が違つたのではないかと思ふくらゐ気分が変」わり、自らの「根から生え抜いた思想」を見出せずにいるというのである。とはいえ「この気分」こそが自己の「思

想」だと考え、「すればわたくしは、まはりの影響によつて、どんな思想も変る生命の流れに住むカメレオン」的なものだと、自己の本質への思いをめぐらせていた。そうした蝶子の持つ感覚は、過去、そして将来に待つていようである。「痛々しい」経験すらも「縹渺とした無限の中に融け」るように受け取らせていたのである。

そのように考えるのは、彼女が自らの経験や感情を「元来正体のないもの」だとみなしていたからだが、蝶子は、確たる信念をもつて自らの行動を「規定」することがない。常に「気分」によつて、あたかも行雲流水のように、自意識にとらわれない。それが「水の性」たる彼女の「思想」なのであった。少年期から学園時代まで、食事中ほんやり考えごとをする癖があった蝶子からは、すでにそうした「無性格」が垣間見えていた。その「無」の力に池上はひれ伏すような思いを抱き、安宅先生は彼女の実質を「水の性」と「規定」したのである。

そもそも「根元の父母」は、花の「停」つ「土」への親しみから求められようとしていた。池上の寮にいた頃、紅梅が「花それ自身、考え及ぶ能力もないほどの痴呆性の美しさ」で咲くと述べた蝶子は、その花のような、一見「痴呆性」とすら感受させる人間としての「おのづから」の生に近づくべく、「無性格」の世界に没入して「根元の父母」を得ようとするのである。

古屋照子⁽²⁰⁾が「女乞食の創造」を、蝶子の「想念を託するため
の必要な極限状況」を設定するための「虚構」とみたように、
社会的立場や人間関係といった係累を「無」にする「極限状
況」は、託された「不如意」などの「想念」を捨て去るのに必
要な環境であった。また蝶子がわが身の「擬装(偽装)」を解
き放ち、ひとり自らの「根元」に還るためにも必要な経験なの
であった。

さて「乞食」となった当初、蝶子は「心の底にうづくもの」
を左記のように表現した。

歿き父をまことの父のいの中に生き蘇らせ、歿き母をまこ
との母のいの中に浮び上らせ、(中略)わたくしに順逆共
に慕ひ寄りながら、その屈まれるいのを伸ばし生かして
欲しいとせがみ付いた男女もろもろの縁者たちに対する悲
愍の気持であります。

こうした心懷を抱いていた蝶子は、「まことの休息」のため
「努めてその悲愍の気持を投げ捨て」ようとする。しかし「夫
婦乞食」や材木店の「ご新造さん」との交流を重ね「半年ほど
も謎に住する」るうち、世の「諸行無常」への思いが恋しくも
なる。「人間の廃朽品」とされる「乞食」に徹しようと「無感
覚」を装い「啞を真似」しながら過ぐす、「自分なるものを留
守」にした「土の上の生活」も、「廣啞がばれ」てからは「驚

町」の川辺へと移る。この町で蝶子は「ぼんやりのお蝶」と呼
ばれるが、そこで「白痴の乞食」文吉と出会うのである。

かつて蝶子は、安宅先生の「舎宅」に向かう途中、声をかけ
た「乞食」の老人から焼いた「唐芋」を食べるよう勧められて
いたが、岩淵宏子はその際の「共食」が蝶子の乞食性をひそ
かにめざめさせた」と指摘する。岩淵は池上、葛岡、安宅先生
との「食縁関係」にも注目し、彼らとの「共食」を通して強
い絆が生まれた」とも論じ、さらに「他の者との(共食)を
拒」んでいた、「超越の神の子のやう」な文吉との「(共食)を
経ること」で、彼は蝶子の「庇護者的存在となった」との見解
を示した。蝶子は、この文吉の純心の力に次第に感化されてゆ
くようになる。

自然への「不思議な感性」を持つ文吉は「学者乞食」の花田
から「人の意志を弱くする」と嫌われ、世話になっていた「貸
船屋」のお秀からは「気が軽くなる」と好意を抱かれていた。
そんな文吉は「ぼんやりを装」う蝶子を「低能」とみて「兄貴
振」つて接するが、彼女は彼の「痴呆」する「空しい様から
「大地に置き忘れた茫漠とした心」の支配や「超越の神の子」
を感得する。おそらく蝶子はかねて自分の求めてきた、性を超
越する「理想」の友、あるいは「土」に「停」つた花の「おのづ
から」の「いのち」を、文吉の中に見出していったのであろう。

蝶子は、のち海へと同道することになる文吉の「大地そのもののやうに茫漠」とした「いのち」と出会うことができた。そうして「河沿ひの土に起き臥し」するなかで「生の憩ひ」のうち自ら「謎の性質」の層を潜り、「謎々なあに、照る日にからかさ」というような「稚純極まる心田の素地に朝夕をあくがれ遊ぶ身」となつてゆく。その心情は以下のように表現されている。

歿き父のかずけたいのち、歿き母のかずけたいのち（中略）安宅先生や池上、葛岡の不如意のいのちも、この心田に入る場合には自他を無みし不如意も如意もございませぬ。滔々として天地と共に流れてある卓犖不羈の大河の流れと知られ、（中略）河身を超越の筏に乗り同死同生の水棹で掻き探るとき、掻き寄すれば歿き父以下の教脈のいのちの流れは、わたくしの一筋のいのちに入り、放つとき、（中略）彼等の教脈の中に融け入ります。

蝶子のいう「心田」は、以前の「重荷」への屈託や「不如意」を担わせた縁者に対する「悲愍の気持」も包摂する。そこは「諸行無常」すらも「それ自身、人生の花鳥風月の装ひ」で次の運命への「力点」とみなせるほどの境地でもあった。「照る日にからかさ」に象徴される、あらゆる矛盾を円融し肯定する、一種の悟境がこの「心田」には生じていた。蝶子は内なる

「本能の川」、すなわち生命的境地に目覚め、自らの「水の性」の在処に逢着したと考えられよう。

しかし蝶子は、のち花田の詮索によつて「賡乞食」を暴かれ、彼と近しい「新百瀬の啓司」からその露見を知らされる。蝶子は「もういい加減マスクを脱いでもいいでせう」との啓司の言葉によつて、あっさり「おのれの偽装を剥が」しているが、それは意識的な「偽装」により「無性格」の「賡啞」なり「ほんやり乞食」を演じていたからである。つまり蝶子はそれまでの「擬装」を円融させる「心田」を得たものの、それはまだ意識せぬまま「おのづから」を体現する文吉のような境涯にまで達したものとはいえなかつたのである。

ところで、のち「鷺町物産会社の技師長」となつた花田は、直感的に蝶子を「ウール・ムッター（根の母）の性がある女」だとしていた。かねて蝶子は池上、葛岡と「この寂しい世の中に孤独の人間」が慰め合う「きれいな三人」の「お友だち同志」でいることを「昔からの理想」と考えていたが、そうした「理想」を持つ蝶子を、花田もまた自分の言葉で「規定」したわけである。蝶子は「男一人」の独占を肯んじ得ない「母性的の博愛」を持つ女性であることを「悲しく受肯」して、「市設の倶楽部式会館」の経営者となる。

こうして蝶子は、いったん「乞食」行を通して得られた「心

田」の境涯を経て、社会的な仕事にいそしむようになった。しかし、先に得た円融境の自覚をもって、周りの人々から被けられた「いのち」を担う「流転」の遍歴はここで終息したわけではなかった。「通俗小説」らしい「大団円」から蝶子はなおも「喰み出し」、さらに「遁れて」ゆこうとする。

小田良弼²²は、「女乞食」への展開を「死の徹底化への道筋」としながら、それはまだ「生への転換に不熟の一步を残すもの」だったと評した。そうして「女船乗り」への轉身をして「絶対肯定的段階」への到達を示す状態とした。なお蝶子は先の感慨において「飽くまで悟得のおのれの謎の地に伏せて、外界との和へは自然の調熟に待ちませう」とも考えていた。つまり彼女の「悟得」は、さしあたり個人的な範疇にとどまり、向後はそのような閉鎖性が、あらためて対他者的な方向性、すなわち「外界」との「和」へと向けられてゆくと考えられるのである。そのような展開を想定すると、蝶子が「乞食」として生きた「休息」期間は、彼女の「心歴」の、更なる転心のために必要な、いわば通過儀礼でもあったとも考えられる。そうして蝶子のさらなる語りからは、あらたな、かつ真の「いのち」の発現が待たれたのであったが、おそらくその辺りを叙述したであろう結末部を書かぬまま、作者は歿したものと推される。というのも、蝶子が会館の経営者となった後に登場する「お

じさん」こと市塵庵春雄と、蝶子に「女の凶星」をつかまれたと感じさせた彼の手紙の内容は、岡本一平の加筆によった可能性が色濃いからである。瀬戸内晴美²³は、かの子の「精神的自伝」たるこの遺作に「一平もこの作品の中に合体して自分の遺言といのちを塗りこめておきたくなった」ゆえの加筆だとした。最近では高良留美子²⁴が、「安宅先生の失踪」までを、一平の加筆のみられぬ「かの子の書いた部分」だとし、そこに「こめられて」いるものは「本能の同型」をもつ女同士の生命のつながりであり、「阻まれた女のいのち」を「受けついでいこうとする意志だ」と論じていた。たしかに文体、構成の緊密さからみても、「安宅先生の失踪」で「生々流転」が終わっていれば「女のいのちの受けつぎ」というモチーフの純度は高くなっていたであろう。

高良のすぐれた見解には共感するところが多いが、かの子の生前も含めた岡本一平の加筆がどの範囲までだったかについては、確定的な判断を下し難い。ただし実業之日本社版全集附載のリーフレットに亀井勝一郎が書いた「最後の五十頁ほどは、永眠後草稿として残ったのを、一平氏が編纂されたもの」という言は、一平が「編纂」した部分が春雄の手紙にはほ相当することからして、「編纂」すなわち「加筆」を示す証左だと考えられる²⁵。

ちなみに「生々流転」のうち、蝶子の葛岡との北関東の旅、「乞食」行の後半から春雄の手紙（蝶子への求婚、自身の回顧とお艶との事情）は、おおむね説明的で冗長な箇所のように思われ、かの子の遺した草稿をもとに一平が書いたとも推量される。なお荒井とみよは、岡本家の人々が設定した「かの子をつくる」場Ⅱ「かの子工房」が、「生々流転」以降の「膨大な遺稿」を、編集発行したと考えていた。そうした遺作群には、かの子の仏教的世界観でもある「生命の流れ」とその継承が見出し難いのだが、それらについての考究は今後の課題とする。

さて、ここから先行作との関連性で「生々流転」を評した例に言及しておこう。同作の構成をして「源氏物語」に「近代的個性を加えた」とする古屋照子⁽²⁷⁾の説は推測にとどまる。「女のいのちの受けつき」のモティフから、かの子の「落城後の女」⁽²⁸⁾（『日本評論』昭十一・十二）を「源の一つ」とみた高良留美子は、「生々流転」とギリシア神話を比較し、人物形象の深い関わりを指摘した。拙稿ではそこにフランスの女性作家、マルグリット・オードゥー（Marguerite Audoux 一八六三—一九三七）の代表的長編『孤児マリイ（Marie-Claire）』との関連性を付け加えたい。

オードゥーはもと裁縫師で、その遺作『光ほのか』は堀口大學訳により第一書房から昭和一三年七月に刊行された。かの子

は随筆「これからの娘気質」（『読売新聞』昭一三・八・二九）で『光ほのか』を「清純な小説」「日本の娘ごころをひくものがある」だと書いていた⁽²⁹⁾。当時オードゥーの翻訳書には、同じ堀口訳の「自伝的処女作」⁽³⁰⁾である『孤児マリイ』があった。その上梓は昭和一二年一月（第一書房）である。外国文学通のかの子は、当時評判の高かったこの作品も読んでいたのではないか。梗概を以下に記す。

純真な心を持つマリイは母の死後、父が行方不明となったため、六歳から「市」^{まち}の修道院にある孤児院での生活を始める。当初は他の女友達と二〇代前半の先生「マリイ・エエメ教師」の授業を受けて過ごすが、エエメ先生は共同寝室と食堂の受持になる。彼女は感受性の豊かなマリイを可愛がる。一歳になり、健康に成長するマリイに「わたしはあんたを完全にしたい」とエエメ教師は言い、マリイも彼女を「欠点のない方」と信じて接した。マリイは数年後に婦人帽子店で働くはずが、院長から「羊飼ひ」になれと命ぜられ、素直に承諾する。自分を「さすらひ人や囚人と同じほど、哀れな者だと感じ」たマリイだが、「商店の売子になるより、羊飼ひになるほうが余計嬉しい」と思うようになって、「農園で働く女中」として一四歳の頃から暮らし始める。マリイはそこで「小山の上の家」の果樹や泉の流れと小道のある庭に親しむが、裕福な青年との

恋と別れを経て農園を出奔。一九歳のマリイはエエメ教師のいなくなつた孤児院で働き出すが、孤独な心を癒せぬままそこを去り、パリ行の汽車に乗る。

『孤児マリイ』は『光ほのか』と違つて女性一人称により語られ、文体面で「生々流転」と相通じている。マリイは蝶子と状況は異なるが天涯孤獨の身で、エエメ教師は安宅先生と同様マリイに親しく接し、心の支えとなる。素直な性格のマリイだがエエメ教師等への感情には変化もみられる。マリイは孤児院を出て、院長が「汚らしい娘達」とした「羊飼ひ女」となるが、農園での暮らしは土に近いものであり、蝶子の「乞食」行とその点で似通う。蝶子がよく庭園を歩いたように、マリイも農園近くの庭をしばしば散策した。なお第八章には大火傷から「啞」になつた娘の話もある。蝶子と同じく、友人達や青年もマリイの周囲には登場している。

右記したように、オードゥー『孤児マリイ』には、「生々流転」の構想に通底するような類似性が比較的多く認められる。仏教思想的な側面はともかく、翻訳書の刊行年からして、かの子が読んでいたとすれば、何らかの創作上のヒントを及ぼしたものと推測されるのだが、他の国内外の作品との検証と併せ、こうした関連性をめぐる調査は継続してゆくことにしたい。

五 おわりに

蝶子が際会し遍歴してゆく世界は、物語の進行と共に変転する。都内の妾宅、学園、池上家の寮から赤城山とその周辺、さらには川べりの町から海へと。その時々配置され、彼女に「取纏る」父母、青年、教師たちの「奇矯ないのち」は、自己の「根元の父母のやうなもの」を恋い求める蝶子の「生命」圏に引き寄せられるように各々の「不如意」を被けて去つた。

蝶子がそうした場所や「複雑な人事」を経つつ求めたものは、「おのづから」なる生命境であつたと考えられる。「おのづから」の生命は、人間界では文吉の「白痴」性に存するもので、寮に咲く紅梅のありのままの「痴呆性」に表わされる「根元」的なものであつた。蝶子は自ら「乞食」の境涯を選び生き、その「心田」を探索し、「根の母」の自覚を得て再び社会人として働く。なおその経緯からはアルノルド・ヴァン・ジュネツプのいわゆる「イニシエーションの物語」(「社会的共同体からの個人の分離、異国での能力の実証と成熟、再編入」³¹)も見出せるであろう。

蝶子の周りにいたほとんどの人間は、組織・世間にあつて社会規範に馴化せられ、文化的「擬装」を強いられて本然の世界すなわち「おのづから」の生の在処を「無意識下に押しや」つ

てしまっていた。つまり彼らは人界に順応するために「偽装」された自意識に妨げられ、各自の生の命題たる「根元」への遡及の機会を見失っていたのである。彼らは、かような「不如意」を蝶子の逞しい生命に担わせることで、その意志を託したのである。蝶子の「乞食」行は、それらの「不如意」を内部で円融させるための「通過儀礼」的な意味を持つものでもあった。

蝶子のかの「心田」の感慨のなかでこうも語っている。

永劫の昔から、それ自ら疑問し来り、永劫の未来へ向けてそれ自ら疑問し去る謎の天地、謎の人生。解決と完成は人間の習性のみ在つて、むかふに在るのではございませんまい。(中略)遂に終りといふことを知らない人間の歴史は、未完成は完成の始まりで完成は未完成の発足点であるといふ連鎖の不分明を教へてゐるやうでございます。

このように、人間界の大きな物語に潜む歴史の「謎」は、「解決と完成」なる分別を超越した自然生命の「おのづから」の流れに包摂されるものであった。そもそも蝶子の「思想」の本質は、周りの「影響」によつて、どんどん思想も変る生命の流れに住む」ところにあった。だから彼女は本然の「水の性」にふさわしい「連鎖の不分明」を生きようとする。それを象徴するごとく、「臺」すなわち終りのない茫漠とした大海へと遍歴は継続されて行くのである。

先述の通り「生々流転」には『孤児マリイ』との類縁性が見出せるようである。蝶子もマリイも、大きな運命に流されながら、孤独な自己の生とその意味の在処を探ろうとしていた。その意味で、両作には横井司⁽³²⁾のいうような「教養小説的なプロット」が見受けられる。横井は「遍歴の途上で蝶子は、認識を深め成長していくというよりも、ただ『生命の流れ』を傍観しているだけにすぎない」としたが、マリイの行動や内面にも運命を傍観する側面は存する。とはいえ「根元」を求め生きる蝶子の心情は、「乞食」行によりその「認識」を深めていた。そうした面からすれば、やはり自己形成的な物語性は「生々流転」からも見出せるのではないか。だがむしろ蝶子は「水の性」ないし「無性格」という本性を、遍歴のうちに探っていた。つまり蝶子の自己形成とは、自己の内面を様々な要素によつて積み上げてゆく「教養小説」的な側面とは逆に、自意識の「不如意」の負担を契機として本然の「無」性格へと向かい、それまでの「偽装」を捨象して「根元」という内なる理想へと還つてゆく行程であつたと考えられるのである。

こうした意味で「生々流転」は、いわば「水の性」の在処を探る自己還元の物語なのである。蝶子が自分の中から見出せずにはいた「根から生え抜いた思想」は、船乗りとして海に住すること「流転」を経ながら、さらなる覚醒に近づくはずであつ

たろう。「墓場」(終り)のない、無窮の「海」なる自然生命に向かう蝶子をもって円還的「団円」を迎えるこの小説は、いわば自意識という人界の「偽装」を脱して「根元の父母」的な無私の境涯へと遡及してゆく裏返しの教養小説、かの子文学流の反「ビルドゥングス」ロマンであったといひ得るのである。

註

- (1) たとえば太宰治は「日本近代の三大長編小説」として「生々流転」、中條百合子「伸子」、島崎藤村「夜明け前」を挙げていた。(堤重久「太宰治断章」「太宰治研究3」和泉書院、平八・七・一五 八五頁)。
- (2) 神田鶴平「創作時評」〔新潮〕三六年五号、昭一四・五・一(一)二〇〇頁。
- (3) S・Y・Z「文学界」〔三田文学〕一四卷五号、昭一四・五・一(一)二六四頁。
- (4) 無署名「岡本かの子『生々流転』」〔文芸〕八卷四号、昭一五・四・一(一)二七二頁。
- (5) 「川の妖精」〔捨身飼虎〕筑摩書房、昭一五・一・一(二八)九三―一二八頁。
- (6) 「岡本かの子論」〔近代日本文学研究 昭和文学作家論上巻〕小学館、昭一九・四・二〇(三〇七―三三二頁)。
- (7) 「忘れられたる問題——文学的なるもの——」〔信仰と文学〕日本基督教青年会同盟、昭二三・六・二〇(八三頁)。
- (8) 「岡本かの子」〔現代文学総説Ⅱ 大正昭和作家篇〕学燈社、昭二七・一〇・二五(二七〇頁)。

- (9) 「芸術——岡本かの子の小説(四)——」〔国語国文〕三一巻五号、昭二七・五・二五(三九頁)。
- (10) 『かの子撩乱』講談社、昭和四〇・五・一五(三六九―三七七頁)。
- (11) 「作家案内——岡本かの子」〔生々流転〕講談社文芸文庫、平五・四・一〇(五五一頁)。
- (12) ほかに「おのづからなる生命のいろに花さけりわが咲く色をわれは知らぬに」「花のごとく土にし咲きてわれは見むわが知らぬわれのいのちの色を」といった歌も収載。
- (13) 「かの子の歌に関する覚書(岡本かの子論その二)」〔文学研究〕九号、昭二七・九・一〇(五七頁)。
- (14) 『生々流転』論——〈鏡〉としての蝶子」〔岡本かの子作品研究——女性を軸として〕専修大学出版局、平一八・三・二〇(一八七頁)。
- (15) 前掲『近代日本文学研究 昭和文学作家論上巻』三一四頁。
- (16) 「自然——岡本かの子の小説(一)——」〔国語国文〕二九巻一号、昭三五・一・二五(二頁)。
- (17) 「命——岡本かの子の小説(二)——」〔国語国文〕二八巻一号、昭三四・一・二五(一一―一三頁)。
- (18) 「宗教文学 その一 岡本かの子『生々流転』」〔美と宗教——東と西——〕北樹出版、昭六三・二・二〇(八九頁)。
- (19) 『生々流転』における女性一人称」〔昭和文学論考——マチとムラと——〕八木書店、平二・四・一六(三二八―三三〇頁)。
- (20) 『華やぐいのち 評伝岡本かの子』南北社、昭和四二・七・二五(二八六頁)。
- (21) 『生々流転』のフォークロー——乞食の意味——」〔昭和学院短期大学紀要〕二六号、平二・三・二〇(四六一―五三頁)。

- (22) 「生々流転——岡本かの子の小説(五)——」〔『国語国文』三四卷七号、昭四〇・七・二五〕二二頁。
- (23) 前掲『かの子撩乱』三七二頁。
- (24) 「一平に歪められたディオニュソスの生命の讃歌——『生々流転』を読む」〔岡本かの子 いのちの回帰』翰林書房、平一六・一一・一五—一四九—一八〇頁。
- (25) 『岡本かの子の小説(ひたごころ)の形象』(おうふう、平一七・九・一七)二六八—二六九頁参照。
- (26) 「岡本かの子という工房——ふたたび『生々流転』をめぐって——」〔『大谷学報』七四卷三号、平七・一・三一—二八—三三頁。
- (27) 前掲『華やぐいのち 評伝岡本かの子』二八一頁。
- (28) 前掲「一平に歪められたディオニュソスの生命の讃歌——『生々流転』を読む」二六五—二七三頁。
- (29) 岡本一平は、生前かの子が「最後に読んだ外国の小説」が『光ほのか』だと証言していた(岡本一平・岡本太郎「父子対話」『文芸』八卷一〇号、昭一五・一〇・一—一三二頁)。
- (30) 宮崎玲子「オードゥー」〔『集英社 世界文学大事典』集英社、平八・一〇・二五)五八七頁。
- (31) ジュネップ『通過儀礼』は一九〇九年刊。マティアス・マルティネス／ミヒヤエル・シェッフエル 林捷ほか訳『物語の森へ 物語理論入門』(法政大学出版局、平一八・七・一五)二二五頁参照。
- (32) 「都を出る娘——岡本かの子『生々流転』試論」〔続・岡本かの子作品の諸相』専修大学大学院文学研究科畑研究室、平八・六・三〇)一一四—一一五頁。